

檄文

Digitalize 2

浏览
言址

静かに呟くCPUの

我々の脳神経に対する挑戦

溶解する

とける

ひとつの死骸に群がる小鳥がひれ伏す

食物連鎖を侮蔑する者の出現

我々は手渡し始めている

委ね初めている

我々が世界を奴隷としたように

我々も奴隷となる

目に見えぬ欺瞞が蓄積され

既知のものとして認知されてゆく

影だ
被写体の無い影

一人人としての苦悩は無視される
そう指示することができる

この掌に　そしてこの指先に
可能な技とは何か

機能的懷疑という哲学が蹂躪する
確率というだけの個性、人間性

CPUがはじき出す予測Ⅱ 確実な未来
それに備えなければならぬ――と

その未来の奴隷となった我々は
それを活用と呼んでいる

受容するのみの脳神経が
その原初的記憶との相克に身を振る

プラットホームの端に佇む者が居る
彼の死の理由とは――

CPUの挑戦が静かに牙をむきはじめている
神になるための挑戦がはじまっている

(2006.2.1)

白い壁

意味に繋がれた言葉を
その軛から解放したい

あの壁――白い壁

白く美しい壁

透明な白の上に

更に透明な白を重ねた――壁

私は死を待っている
独りで

自然の流れの中にある——死を

今、私が見ているもの

あなたがたにも見えているもの

その全てに意味を見出せない

かつて私が見ていたものは何であったのか

その影すら見当たらぬ

言葉は神である

音楽はその下僕である

それを解き放つことの意味——

すなわち、死

白は拒絶の色である

(2006.11.5)

部屋

冴え冴えとした月あかりの
スレートスレートの屋根に沁み込む

蛍光灯のあかりの
ツゲの葉裏をしろうく浮き出す

劣化したプラスチックの
ざらりとした肌触り

滴る光の
霧

享けるもの
わたしがそれになる

雑音が遥か遠くに薄れてゆく
ひと呼吸ごとに

完成された孤独を
静かに繭を、編む

何者も手の届かぬ

白い砂底から湧き出る泉

私は手を伸ばさない

息をしている

(2007.2.2)

日常

勇気がない

ストレ————ト

*

砂はプラスチックとは違う

平らじゃない
風紋 足あと

*

お前の存在なんて、とどのつまり
幾何学程度だろ？

点はゼロである
線もゼロである

我々の五感を超えるものを
それらへ変換し、「可視化」する

我々のもの
我々の世界
どこもかしこも我々の創造物

*

関数、投影
独立変数、従属変数

*

歓喜に代わって快樂が
(-----仮面)
悲哀に代わって憂鬱が

昼ではなく、黄色い光が
(-----部屋)
夜ではなく、暗室が

*

武装された日常

(2006.11.19)

種

眠りの奥地 遙か彼方

希望は恐怖に慄えている・・・欲望の高笑いだ

際限なく続く 反応

お望みなら 目がかすむまで

何ものかが我々を急き立てる

奪取せよ と

一度でも失敗すれば 記録に残る

それは 執拗に追いかけてくる

張りめぐらされた――制度

テロでしか為し得ぬものは、確かにある

太陽はエネルギーの源泉以外のものではない

地球は心地よい惑星であればよい

「機能」とは、いわばコンセントである——
現代の男と女を並べてみれば一目瞭然だ

泰然自若として酒をあおることなど
今や、知識人の面汚しもいいところ

あらゆるところに埋め込まれた
あの外部生命体を見るがいい

「そろそろ種として認めてやるべきでは？」と
なぜ誰も提議しないのか・・・

(2006.11.20)

リチエルカーレ

破り去られた本 それを目の前に
遥かな過去のように思える 14年
僕はただ 生きていた

ただ 息をしていた 今

屋上から見下ろす地面は 既に

僕を破壊するものではなくなっていた

同時に この建物は 既に

僕にとって 重要な目撃者となっていた

昨日 バツハを弾いた リチエルカーレ

時間という冷徹な父を称えたような

むしろ 友としたような

静かに語りかけてくる 微風のような リチエルカーレ

ああ 飛び降りてゆく時間が長ければいい

永遠に飛び降りるままであればいい

どうして人は大気に浮ぶことができないのだろう

どうして ひたすら水平に落ちてゆくことはできないのだろう

別に 死ぬだの生きるだのは どうでもいいのだ

わからなくなったただけなのだ 人間という奴が

愛されるということ 愛されないということ

その違いはどこにあるのだろう

ただ生きてあること——

ああ そのことを指弾する人間と言う奴

ただ息をしていること——

そのことを指弾する人間という奴

僕もまた 人間なのだ

その罪悪感こそ気分が悪い

昨日 バツハを弾いたとき

僕は決めたのだ

人間をやめると

(2006.11.25)

ダスト

埃 塵 糸屑
どこから来るのかしら

ベッドに落ちた影のよう
ふわり ふわり
モザイク模様が変化するような

ビルの換気口から
産廃の中間処理場から
歩き回る群衆の衣服から
遠い隣国から

化学繊維 木綿
シュレッターダスト 合成ゴム 灰
砂やシルト 野鳥や家畜の毛 老化皮膚

風化する文化
風化する物質
風化する人類

陽光

あなたが起こす風
あなたが降らせる雨

あなたが撒き散らす　ダスト

透きとおるように輝いているのを眺めていると
自浄作用、って考える

まだ、あいつらにはクリーンルームが要るわね
もっとも、そこから出なくても
指先一つで支配できるけど

支配って何かしら
防衛本能、かな

静かに舞い
ゆったりと踊る
ダスト達が降り積もる
私たちはそこで暮らしている

生命が死ねば
擬似生命が死ねば
お前たちの世界になる

(2006.12.2)

眺望

ビルの最上階から眺める都市は
電子基盤の上に並べられた回路のように
ある規範をもって息づいていた

信号とカーナビと

経済と社会と

法律と——

電子のように活動するもの

化学反応のように進む再開発

ある部分では腐食するまま

私、という思いが

この眺望のどこに潜り込めるのか

この回路のどこに生き続けることができるのか

自動的にはめ込まれ

自動的に働かされ

自動的に生かされてゆく——知らず知らずのうちに

向かい合った鏡の間に立った時のように

無限に映される、私

その虚像の全てを使役されている

ビルを下りて通りに出ると

人々はそれぞれの顔を確かに持っている

Aであり、Bであり、Cであった・・・

いや、正確には

Aの像であり

BやCの像であった

彼らの本体は一体どこにあるのか

おそらくそれは

彼ら自身にもわからなくなっている

消去しても差し支えは無い

ひとつの像を消すだけだ

本体が消えるわけじゃない・・・”

その時

リカバリーが働いたらしい

サイレンが鳴っている

(2007.1.3)

焦燥

広々とした広間で

私は所在無く寝そべっている

暖かな午後が停まっているようだ

陽射しはわずかしか届かないけれど

それなのに

せつつくような時間の音が耳を離れない

競わなければ——押し潰されぬため、だけに

働かなければ——食うため、だけに

恋をしなければ——不能と言われぬため、だけに

体操をしなければ——健康であるため、だけに

全てに加入しなければ——社会に留まるため、だけに

全てを知らなければ——未来に乗り遅れぬため、だけに

セキュリティシステムの警告音が鳴り響く

録画装置のタイマーが働き始めている

パソコンの液晶画面は「素早くキャッチしろ」と囁く

携帯電話が突然振動を始める

あらゆるおせっかいなシステムが居る

それに尻押しされ、命令される

未来へと加速しろ、と

そのためにアクセルを踏み続けろ、と

全ては「個」を守るためであって、

それと引き換えに、やむなく

「個」に全ての責任が帰されるのだ

ああ、これが自由を守ることなのか

ああ

閉じ込められ、ねじ伏せられている生の戦きが
圧力を高めてゆくのを感ずる

ウィルスのように漂い、我々に侵入し、遺伝子を攻撃する
この強大なシステムを前にして
お前はどうかやって抗おうというのか！

黒く煤けた太い柱木を抱くと

その柱を介して

昇ってゆくのがわかる

僕のうた

お前の声

ああ、和して響き渡れ

単なる解体と消滅を追認し

虚無こそが、新たな我々の生を支えるのだ、と
哀れにも宣言する者ども

おお、聴け

お前たち自身の中に在る
生の戦きを感じよ

ああ、叫べ

うたえ

呟け——

僕のうた

お前の声

そのの沁みこんだ涙を、
流せ

(2007.2.12)

檄文

詩人たちよ叫べ

かつて産業革命の際に

煙を吐き出しながら

冷徹な力で人間たちを使役した

あの黒い蒸気機関のように

今、我々を使役しているものを見よ

まるで不規則な運動をするゼンマイ時計のように

チチチチ・・・と、かすかに呟きながら

我々の手首から先の動きだけを受けて

まやかしの世界を浴びせつける液晶画面——

棄て台詞が撒き散らされている

撒き散らされたもの全体が

無数に、ゆるく、絡み合う

F (x)

G (x)

装飾の限りを尽くし

ひたすら我々を吸い寄せ続ける

五感はそれぞれの部屋に押し込められ
それぞれの最大限の飽食を漁り尽くしている

詩人たちよ叫べ

我々が何ゆえ詩人でなければならぬかを示せ

我々が叫ぶ相手は誰かを思い出せ

己を表現すること——すなわちそれが

現代の偽善を表現することを思い出せ

我々の武器は言葉だけではない

五感すべてを武器とせよ

全身を拳げて戦え

五感を分断と安楽死から救い出せ

詩人たちよ叫べ

孤独であることから逃げ出すな

外部生命体が提供する安易な暖炉に集うな

それに惑わされた群衆は
既に理性を喪失していることを知れ

戦うべき相手は群衆の中に巢食っている

我々が愚鈍な奴隷ではないことを示せ

我々の手には

見えない手錠が嵌められていることを示せ

詩人たちよ叫べ

己のために涙を流すな

創造神となろうとする空しい希望のため

ただ外部生命体を積み上げる愚かな群衆のために

それが死を意味することを知らぬ愚かな群衆のためにこそ流せ

詩人たちよ叫べ

小説家でもない

音楽家でもない

科学者でもない

映像作家でもない

我々のみができ得ることを
五感を挙げて示せ

(2008.2.4)

瞑想

私の中に在る電子の雲
潜在的な
不規則な

歩くもの

飛び交うもの

かつて触れたことのある、
しおからい涙の温かさを持つ——私自身の
それ

曲面に映し出される灯り

沈黙が

振子のように揺れ続けた憧れを冷やしてゆく

執拗に変奏され

瓦解してゆくものにこそ在る、と私は信じる

あるエントロピーが生命の渴きを増幅している

保存と刺し違えることさえ厭わず

日常とはかけ離れた遙か遠くに

あるいは死そのものの死滅と同義ではない永遠というものがある

ああ

明滅し

廃棄された物体の中で孵化しはじめる鼓動に耳をすませ

媒介を始める無数の微細なプリオンの鋭い分子構造

間接的な意思の作用が私自身を問い詰めている

紫外線によって劣化したプラスチックのような意思——
それをいかにして再生するかを

(2007.2.20)

対象

それは個人的な帰結である

うたかたの

雨の

流れの中にひそかに息づく魚

崇める者の視線のひろがり

それは個人的な帰結であり

かつ

普遍的な想いである

私の奥底に沈み隠れる動物的な――

それは意思というべきか

それとも神経それ自体の固有値と言うべきか

石張りの床のつめたいつややかさの

独立変数であり

従属変数である

知れ

自然界にある数学法則の

最短であることの解とは無関係であることをこそ

消滅と創造の同時性

生命を複製することの目的

あるいは意思とは何か

私は川辺に佇む

水面に踊る反射体を己に写し込む

(2007.2.23)

選択

無数の小さな抜け穴が
その道には用意されている

もしくは

無数の分れ道が
その道のすぐ脇を通っている

もしくは

おやつを載せたトレイが
ひっきりなしに目の前に突き出される

もしくは

誘惑的な煙草の煙が
かすかに漂い続けている

もしくは

無数のチャンネルが明滅し
視覚と聴覚のみを働かせる

もしくは——

私は手を伸ばす気になっている

少しだけ

ちよつとだけ

隙間を埋めるだけ

それだけのことだろうから——

それが麻痺作用のあることを知ってから

私は手を伸ばさない

拒む必要の無いものであろうと

滋養のあるサプリメント、であらうと

私は手を伸ばさない

「自身」と「感覚器官」とは

互いに愛撫しあいながら

全く別の存在として生きている恋人のようなもの・・・

「自身」の欲望を満たすこと、と

「感覚器官」の欲望を満たすこと、とは

私という同じ場の中で生じている反応なのだ

私の手は求めている

私の手は小刻みに震えている

選ぶこと——

それを目前にして

(2007.5.26)

あこがれ

お茶の葉の香り

シューベルトのピアノ・ソナタ

潮騒

くつろぐ猫

携帯が鳴る

特売の始まる時間を告げる時計

病の警告を発するテレビ番組

立ち上がらねば

ラヴェンダーエキスの香り

モーツアルトの五重奏

葉擦れ

絵本

DSがある

怠惰を指弾する街

契約、手続き

時は金なり

静寂が急ぎ立てる

静寂そのものの苛立ち

励起状態の 대기

この星は微熱を持っている

私自身は部屋の中

洩れ入る熱、音、臭い

——情報

それらが充満していく

どうするのだ

どうしようというのだ

どうするつもりなのだ

どうせよというのだ

金がない

気力がない

誰も居ない

何もない

あるのは私自身

こき使われ

眠り、食い

部屋の中でのみ知をもてあそぶ——

優雅、優美

アンダンテ・モルト・アンダンテ

融け合う五感

—————あこがれ

(2007.6.17)

水面

神々が神々となるまでの

気の遠くなるような長い年月————

その遥か遠くから

減衰されて届いた小さな波

揺れ

溶けていた光を析出し

撒き散らす波

その水面に突き刺さる————音の破片

32bitの像

私の五感を模倣する者が居る
神々の時間を
縮めようとする者が居る

微細な波の頂点のみを渡る
飛び石を伝うように・・・
光をも超え
置き去りにして

Digital by digital.

私は置換される
手をかざしてみる

薄れてゆく五感
消えてゆく生

(2007.6.24)

微熱

安定した核反応が続く——
じりじりと照りつける太陽からの熱線が吸い取られ
じわじわと地面に蓄積されてゆく

苛立つ人々が

憔悴した人々が

建物から建物へと伝い歩く

シナ海の彼方から偏西風に乗って漂うガス
海流に乗って漂ってくる有機化合物

我々の投資によってもたらされた無秩序

老いた者たちが舌なめずりをし、群がる

享受せよ

ひたすら享受せよ

剥き出しの崖から垂れ落ちる泥水が細い流れとなり
波に消えてゆく

ばらばらになって融けてゆく氷の欠片とともに

こういう場合はこうしなればならぬ
ああいふ場合はこうしなればならぬ
そして、このような場合は——

「無意識の自律」を忘れた大気が暴力を振るい
地上をやみくもに攪乱する
皮膚の疥癬を掻き毟るように

AからはBしか生まれない
CからはDとEしか生まれない
Fはどうだっていい・・・

蓄積されてゆく熱が地下の何ものかを目覚めさせようとしている——

微熱に病む星を冷やす者は
いつ現われるのか

影を撒き散らす者は

いつ現われるのか

(2007.7.1)

離反

狂ったことさえ知らぬ指

私はうづくまる

置いてきぼりにされた場所を見回す

総意という趨勢が導く先

私はうづくまる

回転する円板が伴奏を受け持つ

多様性すなわち自由であるとの認識

私はうづくまる

鈍い反射光の散乱が満たす塵の雲

呼吸するたびに薄膜の層が重ねられる

私はうづくまる

新たな「見えざる手」がある
その下で行われる無数の演算

私はうづくまる

創造と呼ばれる行為の離反

その離反をも材料として再生産されてゆくもの

狂ったことさえ知らぬ指

私はうづくまる

淘汰されるのを待つ

神を呼び戻すことはもはや——

(2007.7.3)

追加された次元

天へと帰還する銀の光

その束

白い風車がゆっくりと回転する

その軌跡

自らの複製を企む者よ

乾いた6月の夜に辺りを見回すがいい

その扉はお前を隔離するものか、それとも――

売り渡すものか

張りめぐらされた信号径路

その新たな次元

空間とは無縁の

五感とは無縁の

再生ではなく

再生産となったもの

それこそが紛れもなく生である、と——
全ては形を変え、えるのみであって

永遠である、と——
声高に叫び、喚く組織体

そして、その傍らで

その力によってのみ

朽ち果てる速さをコントロールする肉体

場所

時間

環境

無意味な関数となったそれら・・・

(2007.7.5)

手触り

マンホールの中をのぞき込む

曲がっている線
血が固まっては融ける——繰り返し

あらゆる者が大衆から抜け出し
自由という名札を胸に留め
ああ、再び煽動者を求めている

晴れ間の覗いた灰色の空から
時折落ちてくる滴は、まるで
生物の体内から出る滴りのようだ

凍りつき、そして融解した
ふにやふにやの碧い茎を折ると
わずかに粘性を帯びた水が指にまとわりついてくる

切れる寸前の縄がかすかに軋む
無数の黄色い小さな渦巻きが
現われては消える——とめどなく

なまあたたかく、同時にひんやりとした唇

感覚器と化した我々の口そのもののように
既に放棄された機能を探し出すのは不可能だ

ある固定観念があるとする

それを蹴飛ばしながら歩いて行く者が居るとする
その者はいずれ嘔吐することになるだろう

古びてゆく都市が見える

憐憫という文字を失った者たちが見える

落ちぶれた者は蹴飛ばせばいい・・・

(2008.2.9)

リボン

ひらひらとしたリボンを引くと
楽しげな心持になる

どこまでも引いていきたい

いつまでも引いていたい
宇宙の遥か彼方まで引いていきたい

隔てられた壁を伝い歩き
その手触りを確かめる

死を与えること
生を享けること

その間にある——ふわふわとした日常

点が線となるように
無という欠片で構成された時間

このリボン
単に長いだけであって
既に繋がれていないのかもしれない

このリボンに働く張力こそ
楽しさの源泉だ

崩壊
誕生
物質反応

我々が単なる宇宙の一部となること
生を溯ること

すなわち——神を踏み潰すこと

切り刻まれた意思・・・
それを再結晶させるもの

夜空に瞬く星座となって
リボンを引いてゆくこと
たった一人で引いてゆくこと

己自身を抹殺し
触媒となること——
そのことを抱きしめている

(2008.3.13)

告知板

自動でリロードされるごとに
次々と新たに書き込まれる私的判決

ほんのすこし躓いただけで
瞬時に晒し者にされてしまう

それは制裁なのか
それとも群衆の鬱憤晴らしなのか

密告という言葉は既に過去のものだ
この匿名世界の中においては

「それが嫌なら右へ倣うことだ
あらゆる者の目を恐れよ」

試しに自分の背中に貼ってみるがいい
私は密告者である、と

たちまちのうちに、蜘蛛の子を散らすように
君の周りから人々は消え去るだろう

そして君のプライベートが
あっという間に世界に広まるだろう

かつての秘密警察のように
メディアは鵜の目鷹の目で狙っている

街では監視カメラが公然と盗撮を行い
学校やオフィスでは無数の目自体がそれに代わっている

ああ、また一人の人間が躓いた・・・
そして制裁を怖れて命を絶ってしまった

その途端、メディアは嘸み付き
掲示板は埋め尽くされた

いひひひ、という笑いは聞こえない
デイスクを冷やす音が聞こえる

(2008.3.16)

救世主の横暴

(永遠の眠りへと誘う橋がある
それを渡る前に、せめてひととき
まどろむことを許したまえ)

「それは許されぬ」

*

システムが俺達の後を無言で尾行する
誰ひとりその事実を口にしない
はつきりとわかっていながら・・・

社会はあいつらと取引を継続している
指先で何でもこなせる便利さと引き換えに

社会のあらゆる統制を委託する、という――

まるで魔術のように

大気に満たされた警告の文字

一度躓いたら、それが最後なのだ、という

ある指導者は分かっていた

「再チャレンジ」の困難さを、そして

自ら押し潰されていったのだ

競争原理プログラム――

その中に「慈悲」の文字はない

システムにとって不要なその文字は・・・

お前が俺の退路を断ったのだ

そして俺の手を衝き動かしたのだ

前へ、ひたすら前へと

己が死さえ選ぶこともできず

削除されることを思い、さまよう・・・

そして線路へと突き落とした――

滑り込んでくる電車の重量と

車輪と線路との間のわずかの摩擦

それが俺の罪状を左右する

*

(永遠の眠りへと誘う橋がある

それを渡る前に、せめてひととき

まどろむことを許したまえ)

「それは許されぬ」

(2008.3.30)

Temporary

必要無いと思えば必要はない

次々に閉鎖してゆくガソリンスタンドに
張りめぐらされた黄色いバリケード

その内側の空洞――

傍を通り過ぎる人々の胸の中に

掬い上げられた

かすかな微生物

建物の連なりの間から覗く雲は

火傷の皮膚のように生々しく

赤茶けて膨れ上がり

何物も

何者も

操られている、と見える

時折爆発する呻きが

その張力を高め

反力を増す

人々の表情に埋め込まれたものに
遠くを見ることはない

ただ複雑に絡み合う糸だけがある

薄闇の中に浮かび上がる桜

千分の一ワットの蛍光

それこそが我々の生命

ひとり

またひとり、と

歩かされている人びと

私は時計を見る

18時半

中世の宗教的時間

我々という歯車

それを制御するものは見当たらない
ただ生命だけがある

規則的運動としての生命だけが

必要無いと思えば必要はない——

(2008.3.31)

点

電子レンジの中にある鉛筆
オレンジの光

テーブルに置かれた古靴
小さなサイズ

天上から吊るされた——
針金のふた巻

収束

かつての僕の幻像

叫ぶ
空を切る

蜘蛛の巣のようにまとわりつく
記憶

僕は棄てたのか・・・本当に
棄てられたのか

重ねられ
別々のチャンネルを写す3台のテレビ

交錯する音声
捉えられることを拒む映像

死とは何かを確かめたい
生から死への変遷を確かめたい

破滅するために生まれてきた
なのに、時計は停止してくれない

額を締め付ける鈍痛——
それを超える激痛を探すのだ

ガラスや陶磁器の破片の山
再生を拒まれたものたち

破壊することはおぞましい
破壊されたものが愛しい

収束
取り除けられた者としての自分

収束
無機物として扱われた僕

収束

点

境界

終わりたい――

終わらせたい――

それは容易いこと

生き続けたい――

生かし続けたい――

それは容易いこと

受け入れるものとしての死がある

望むものとしての死がある

その延長としての生があるに過ぎない

(ぶるぶるとしたゼリーのような・・・)

事実というクレバス

その奥を覗き込む度

すうっと血が引いてゆく

(逃亡のための破滅・・・)

誰も歌おうとしない

誰も慰めようとしない

誰も両手で持ち上げようとはしない

(ひとつまみの・・・)

ただあるものといえは

秩序というものに対する

漠然とした渴望だけだ

扉は開かれています

あらゆる方位に向けて開かれています

——扉の存在する部分でだけ

あらゆる視界が

実は遮られている

だから誰ひとり「眺め」とは呼ばない

試しに砲丸を投げつけてみると
割れた画面の向こうに
新たな視界が開けてくる

コマーシャルリズムに逆流する——
1億分の1ずつ異なる性向
それが交叉し、個人へとさらに逆流する

既に「個人的な」ものなど消えている
全てはMassとしてふるまっている
サンゴのような共生体

(それを抜け出せばどうなるかぐらい知っている)
終わらせることも
生き続けることも
容易いこと

(2008.4.25)

満たされた――

満たされている

コップの底に残った滓
そこに液体を注いでいき
とにかくコップを満たす

満たされている

微動の連続が
時間を満たしてゆく
それを維持するためにしがみついている

満たされている

慈しむ対象が無ければ
せめて憎悪の対象を・・・
それで心を満たす

満たされている

急がねばならない
急いで満たさねばならない
あらゆる代替物を使って

満たされている

音声、映像

不特定多数との交信
「時間」を埋めてくれるもの

満たされている

物質としての
色彩としての
そして、量としての

満たされている——

助け合い、相互扶助・・・
満たされているからには
そんなものは不要だ

満たされている

外部生命体が全てを代替してくれる
自動的に増殖させておけばよい
そこに寄りかかっておればよい

満たされている

満たされないことの恐怖が
あるいは満たされていないことの事実が
一瞬たりと鎌首を持ち上げぬよう——
飼い慣らされた奴隷

満たされている、と——
そう信じ込まされている

(2008.8.31～9.10)

隔離空間

個を解放するために隔離された空間が
次第にふくらんでゆく

解放されず

押し込められ

満たされず

分裂・増殖を重ねる個が

ひしめき合う圧力によって

選択をする必要性などありはしない

無数の平行線——

それは同時に

既に用意された無数の解答案だ

都市という名の・・・

死は訪れるものではない

呼び寄せるものである、と

メディアがわめきたてる

無数の平行線に囲まれた空間

死は遠ざけられ

病として

事件として扱われる

おぞましいものとして

息苦しい「自由」の部屋

疑義ばかり

確信のかけらもない

用意された仮定の中で

計算だけが行われる

流される、ということ

その先にあると思われるもの

現在があつて未来がある——
その感覚は消滅している

生——というものの手触り
そんなものはとっくに消滅している

飼い慣らされた想像力
誘導された創造物

それらが打ち破られるなら
いっそこの星を煮立ててしまえ

この巨大な圧力が
干渉し重ね合わされたとき——

(2008.8.10)

糸

糸を引く
引き摺る

手繰り寄せているもののわずかな抵抗
ときおり滑る感覚

かつて私の所有物であった、この手

暗がりをまさぐるこの手は
私の命を受けていない

遊離し、自由となったこの手

生命にとっての永遠とは

単なる利己的な意思に過ぎぬ

そして、私というものは

単なる一個体の意思である

死んだはずの神の戦略
螺旋構造に組み込まれた戦略

私、というものが
私、のために生きる必要などない

置き去りにされた、意思
置換された回路

かつてない進化の形態が
静かに開始されている

私の「手」が糸を引く
引き摺る
かすかな抵抗を感じながら

(2008.10.17)

命令

君、の居ない世界

ただあるのは、

あれ、であり、

それ、であり、

またはその複数

そして、僕、である

人工物にきっちり守られ

閉ざされた部屋で

その、僕が、呻いている

それは既に、部屋、ではない

まさに世界

エゴイステイックな寒々とした世界

その部屋の中を動き回る者と言えば

ただ、僕だけ

その他は意思のない者たちだけだ

プラスチック製の棚に沿って
指を滑らせる

あまりに滑らかな触感

パソコンが命令を待っている

キーボードは単なる伝達係りで

その背後に潜むのは巨大なシステム

僕、を閉じ込めるために

機能的、という名の画一性に塗れ

周到に計算され尽くされた部屋

時にここを訪れる異性は

ただ一つの偶然である、僕、を求め

貪るようにこの身体を舐めるのだ

既に偶然性を放棄したこの僕の中に

ひたすら本能の解放を探し

せめてもの慰みを見出そうとして

そのような動物的営みにさえ

お節介を働こうとする者が居る

そのために必死で計算をする、この僕、が

そして、この僕もまた

その後、空虚で吐気のする酔いの中で

システムの監視下に戻ることを意識する

静謐、とは呼べぬ沈黙が支配する

空間性のない巨大な世界——

いや、反世界

拳句の果てに、僕から遊離した本能は

もっと、さらに、と喚きたてる

クエリー、クエリー、と

瞬間を繋ぎ合わせただけの

近似的な時間に覆い尽くされている

1秒後には、その60倍の時点では、と

誰もみな、歩き回る必要性さえ

これっぽっちも感じることはない

糸を手繰るためにリールを巻くことだけが必要性を持つ、と

無数の方法があるのだ

既に用意してあるものから選べ、選べ、さあ選べ！

どれもみな計算され尽くされたものばかりだ

お前が自由を握っているのだ、お前が

僕、だけが自問自答するよう強制される

これ、は命令を待っている、待っている、待っている、待っている！

無音の中に回転する命令

明らかに、僕、の声をした命令

僕自身の下した命令じゃないか

気が付くと壁のボードが割れていた

ギターもぐしゃぐしゃになっていた

あらゆる物が散乱していた

その中で、ただひとつ
ディスクの回転する音だけが
低く呟いていた――

君、の居ない世界
ただあるのは、
あれ、であり、
それ、であり、
またはその複数
そして、僕、である

(2008.11.29)

醗酵

無機的な幻滅が私を取り囲む
中世のヨーロッパのような醗酵の時代

見よ

互いに無縁な、しかも膨大な帰結

抜け出ようとする者が

ふいに回れ右をする——無意識に

許さない

許されない

一方で生の果てしない延長を望み
もう一方では生の解消を望む

取り残された本能が身悶え
信号を頼りに喘ぎを交歓する

高純度な美であり、同時に
羽化そのものを失った美

それら膨大で独立した帰結を
微かに引き寄せあう引力とは何か

第二のルネサンス

その姿は未だ現われていない

(2009.2.7)

プリズム

プリズムを通過した透明な陽光は分離される

(いかなることがあろうと私は書く)

死という事実が目の前にある、が

しかし、目を閉じたお前の顔は、今

ほんのわずかだけ眠るときと何ら変わりがない

その一方で

増幅された青い波長が

暴力的な時間の横顔を照らす

物質への回帰が進行しているのは
何も、この目の前においてのみではない
生きている我々の中においても変りはない

(舞曲の延長であるものなど所詮、興味はない)

たまらず外へ出ると

斜めに傾いだ信号の点滅が
我々自身の眩暈を警告している

次々と感染は拡大し

あちこちで喉が掻き切られる
ひとたび狂い出したら止められない

20億光年の空間など要らない

我々を飛び越えて感染を広げるための
それだけの可能性しか有しない空間など

(現象という映像だけが屈折、分離する)

分離したそれぞれの波長光
それらが再び交錯、散乱し
我々を幻惑する色彩の乱舞となって死を塗り潰してゆく

おぞましい腐乱など存在してはならない
それは廃棄されねばならない
完全に抹消しなければならぬ、と・・・

終いには生命など不要ものとなるだろう
我々は生命から逃げ出すことになるだろう
生命ではなく、機能を選ぶことになるだろう

(果てしなく続く機能的活動のみが残る)

僕はほとほと嫌気がさしていた——
と、その時
ひとつの歌が流れてきた

「旗を掲げ 旅立つがいい

プリズムを棄てよ

お前自身の掌に受けた陽光

その温み

お前を愛する者たちの血の温み

保存ではなく

再生を行うこと——

新たな戒めを記すがいい
「

それはあまりに無慈悲で苦しすぎた
分かりきっているほど分かっている

僕はそれに耐え切れるのだろうか

そこら中に組み込まれた無数のプリズムが

むしゃむしゃと陽光を食い漁っている

残されたものは単なる排泄物のような散乱光

滅することの機能的意味——

フガートな自由律という

もっともらしい顔をした計算結果

(滅び、朽ち、消え去るがいい)

既に僕の目は閉じられていた

無意味であることなど、もうどうでもいい
狂っているのは我々自身であるからには

僕は軽蔑を込めてランボーの名を口にした

そして同様にピカソの名をも

予言者として去っていった彼らの名を

目の前に見える二本の銀色のレール

その続く先ではなく

そのレールそのものの呼び声の向こう側

(その2本のレールとレールの間にプリズムがある)

僕は敗れる

(2009.2.14)

点滅

蛍光灯が点滅している

干からびた時間が点滅している

その中で淡々と営まれているものが

コマ送りの映像として映し出され

野獸的な欲望の鎌首を持ち上げてゆく

*

叩き切ること

徹底的に叩き切ること

デジタルとはそこからスタートするものであり

次々と伝達される信号は

いまだ不完全な集合体に過ぎない

時間というものがこれまで醸成してきたもの
すなわち——

変異と消滅、そして統合といったものの内
変異だけをひたすら保存すること

そののみが永遠という幻想をかき立てている

3次元の直角が林立する上方の空間を

伸び縮みするスケールが泳いでいる

何らの対話もなく

自由気ままに泳いでいる

雑然とした多様性の許容された地上とは無関係に

ウィルスのような者達は

寄生のみによって自己保存に熱中する

いかに寄生の策略を凝らすかに熱中する

次第にしぼんでゆく対象に不安を覚えながらも

進化のみによって乗り越えられる、と自らに言い聞かせながら

永遠という幻想

忘れ去られた

あるいは忘れ去られることを強いられている——死

それを塗り潰すべく提示されているもの

ひたすら提示に提示を重ねてゆくもの

*

蛍光灯が点滅している

意識がコントロールしようとする

次第に増してゆく速度に

ひたすら追いつこうとし

次第に疲弊してゆく意識が眩暈を起こし始めている

(2009.3.5)

廃墟

崩壊の廃墟を逍遙して

新たな地平が見通せることに気付く——

それは何も世界戦争の後だけではない

かつてそこにあったもののかすかな気配

熟しきった果実が地面に落下して散らばっているかのような——

濫費であり、無為であり、また模索であるもの

人類を支配しつつあったランダムなシステム群は
廃墟となった都市の底深くに巢食い
姿無きままに、新たな摂理の座を再び企む

同時に、行き場を失ったエクスタシーは
亡者として、ふらふらとさまよい
宿主となるべき者をあてどなく捜し求める

直線と、数学的曲線が崩れてゆく——その中で
わずかに、慄えながら腕を伸ばし
やっつとのこと、しがみついて残っている意思

それを不気味に待ち受ける者の視線——
それが無数に、3次元的に交叉している
あたかも蜘蛛の巣が獲物の振動をじっと待ち受けるように

無秩序であることの閉塞感に覆い尽くされ
恐怖に対抗するために研ぎ澄まされた狂気は
己自身についての生命感覚を麻痺させてゆく

獲得すべき自由は存在せず
ただただ、決して制止されることのない
闘争と狡知が跋扈するばかりだ

自ら蛍光を発し、点滅する者に近付いてはならない
彼らは、星などではない
喰う者を誘引しているのだ

空洞と化した創造物の群れは、今や
新たな緊張に満たされており、同時に
あらゆる希望を、そして社会性を拒絶している

これほど見晴らしがよければ
一度経験した歴史のとおりに進行するだろうと
容易に想像できようものだが・・・

創造者は姿を隠しているのだろうか
それとも完全に死滅してしまったのだろうか
創造物どもが嗅ぎ回っている創造者は

(2009.4.26)

迂遠な作用が

じわりじわりと働いてゆく

目を開いているのか

それとも閉じているのか――

枯渴した想像力に代わって

次々と脳細胞を占領する「事実」

個室の扉にかけられた錠前

彼らは見抜かれることを怖れている

モニターに映し出される「事実」

くまなく映し出された、それさえあればよかろう？

悲鳴のような音を聞いたのは

あれは、空耳であつたらうか・・・

くつくつとした含み笑いを聞いたのは
あれは、空耳であつたらうか・・・

モニターを操作すると

確かに、それらは映像付で記録されていた

彼らは言う

我々は、事実をすべて掌握している。

小さく、狭い世界の中で

宇宙全体が歪んでいる、と喚き散らすことは無意味だ。

(確かにそのとおりだ・・・)

僕は扉を慎重に調べてみた

そして、一息に蹴飛ばしてみた

意外にも鍵は脆かった

僕は逃走した

僕の五感が大きく伸びをするようになったのは

それ以来のことです

(2009.11.23)

アンダーグラウンド

沁み付いた血糊は乾いてしまった
既に誰も振り向く者はいない

乗り遅れた者どもだけが未だに
新たな陶酔に溺れているに過ぎない

地下壕に潜り込んだとしても安息はなく
監視カメラが常に動作している

新たななる秘密を産み出すことは
いまだにできていない

すべてが陳腐になり下がり

ばら撒くべき何物もない

我々の目指す自由と似て非なる自由
定められた条件の中での限定的自由――

あの匣の中に隠されているものに
今は何の意味もない

場末の部屋で声高に叫んだ挙句

「反逆」にも満たぬ犯罪に走った愚物ども

それらは10年前に我々が示したものの
単なる下らぬ模倣に過ぎない

新たな巧妙な凶器を探すのだ

静かに

ひそかに

悟られぬよう

(2009.12.6)